

「あ！萌え」の構造

(番外編 その2)

- 宇宙戦争とゴジラを巡って -

総合心理学部 齋藤清二

前回は「番外編」として、最新のヒット映画である「君の膵臓を食べたい」について書いた。このようなヒット作品は、多くの人々を捉えたという事実から生じたものであるから、広い意味での「魅惑する/される」という現象である「萌え」と何らかの関連を有しているだろうという、いささか強引な理由が、番外編で取り上げた理由であった。今回は、このような考えを拡張して、日本において、非常に長い

間、多くの人々の心を取られてきたと思われる映画作品シリーズについて論じてみたい。近年の概念である「萌え」とは必ずしも直接関係がないという点から、今回も「番外編」とする。実はこの論考はかなり以前の考えを反映したもので、すでにその一部を公開したこともあるものを編集しなおしたものであることをお詫びしておく。

1. 侵入する圧倒的なもの

だいぶ以前のことになるが、スピルバーグの「宇宙戦争」のDVDを家族と一緒に見る機会があった。もちろん、この作品は、有名なH.G. ウェルズの原作によるもので、オーソン・ウェルズがラジオドラマ化して放送したところ、本当に火星人が攻めてきたと勘違いした視聴者がパニックに陥って大騒ぎになった、などという歴史的エピソードでも有名である。原作では舞台はイギリスだったはずで、確かロンドン郊外で、火星（正確には火星の乗り物：トライポッド）と、英国軍が戦闘して、あっという間に粉砕されたというようなシーンを記憶している。今回のスピルバーグ作品では、舞台を米国に移し、原作には登場しない家族を登場させ、父と息子の葛藤、父と娘の愛といった、思いきり西歐的家族ドラマとして作品を描いている。ミクロの、まさに虫の視点から、このデザースターを描くという構成はある程度成功しているように思われる。

最初の方で、父と娘が二人で会話しているシーンがあり、手にとげを刺してしまった娘に、父が「膿んでしまわず、抜いてあげよう」と言うと、娘は、「抜かなくていいわ。からだは自然にとげを押し出すから」と言う。このやりとりは、もちろん本編の内容とは直接関係のないエピソードなのであるが（このとげが後のストーリーの中で再び問題になることはない）、このやりとりは、メタファーレベルでの伏線に

なっていることは明らかである。

つまり、火星人は外界から日常世界に突き刺さったとげであり、それを無理に抜く（軍隊などが闘って火星人を排除しようとする）のは無益であり、自然（身体）にまかせれば、とげを自然に押し出す（火星人は自然の力＝ウイルスによって、押し出されてしまう）、ということを示している。しかし、このエピソードの用い方は、いかにもアレゴリー（寓話）的で、メタファーとしては、それほどスマートであるとは言えない。H.G. ウェルズの原作でも、火星人は全く歯が立たないほど強く、人為的な努力ではどうしようもないが、結局は自然の力によって自滅する、というストーリーが強調されている。そこには、運命に対する諦観と、人為（科学）の過信に対する警鐘が込められている。

2. 破壊と再生の象徴としてのゴジラ

異界からの圧倒的な力を持つ侵入者に対して、人間がどのようにして折り合いをつけるのかというテーマは、この手のドラマとしてとしては、一つの普遍的な主題であると思われる。日本で圧倒的な人気を誇った映画「ゴジラ」シリーズは、このような、破壊的で巨大な侵入者の代表として、考察に値するのではないかと私は考えている。以下に、ゴジラのストーリーの変遷を材料に、考察を進めてみたい。ただし、私はゴジラの最新作であり、つい最近

大きな話題になった「シン・ゴジラ」は見ていないので、最近のゴジラシリーズについて考える根拠をもっていない。少し古いシリーズを題材とした論考となることをお許し願いたい。

ユングの晩年の著作、『人間と象徴』には、ゴジラ（初回作 1954 年）の映像が、抑圧された無意識の破壊的な攻撃性を象徴するイメージの例として載せられている（ユングはゴジラを見ていたのだ！）。ゴジラはとてつもなく恐ろしい存在であると同時に、私達を魅惑する側面を持っている。この破壊的な攻撃性は、世界を破壊し、再生へと導くシヴァ神にも比べられるような、生命力そのものの（リビドー）の象徴として理解されるのが適切であると思われる。日本におけるゴジラ作品の流れは、ゴジラによって象徴される「生命力」を、如何にして全体性の中に定位、調和させるかという試みのくりかえしとして理解可能であると思われる。

3. 日本におけるゴジラシリーズの変遷

初回作の「ゴジラ」は、1954 年の作品であるが、今、ビデオで見ても圧倒的な印象のある作品である。私は 3 歳だったので、その初演を見たはずはないのだが、親から、「映画館から泣いて帰ってきた」という話を何度か聞かされ、そう信じていた。しかし、おそらくこれは、第 2 作の「ゴジラの逆襲」ではなかったかと思う。ゴジラは海か

ら現れ、東京を破壊し尽くし、自衛隊による攻撃は全く無効で（このへんは『宇宙戦争』に似ている）最後はオキシジェンデストロイアという超物質によって、破壊され白骨となって海に戻っていく。この海から来て海へ戻るというのが、ゴジラシリーズの基本パターンである。

ところが第 2 作以降では、早くもゴジラと闘うライバルが出現する。初代はアンギラスだが、あえなくゴジラによって蹴散らされる。最後にゴジラは氷山の下に埋められる（凍結されたわけだ）。ここでは破壊的な生命力を同化することはできず、再度凍結状態に戻したわけで、いずれまた復活することが運命づけられていると感じられる。その後、キングコングやモスラなどが、ライバルとして導入され、悪役のゴジラと正義の怪獣の戦いが続くが、ゴジラは海に撃退されるだけで、退治されることはない。

次に導入されたのが、永遠に戦うライバルとしての、キングギドラである。ここから、ゴジラの位置づけが変わる。キングギドラという、三つの頭を持つ有翼の龍が、より強力な破壊者として登場することによって、ゴジラは人間の側にたつものとして、意識に取り込まれる。同時に、ゴジラシリーズはどんどんその原始的な魅力を失っていく。要するにおちゃらけていくのだ。同時にゴジラ映画シリーズの観客動員力も低下し、昭和のゴジラシリーズはいったん終結を向かえる。

平成新ゴジラシリーズでは、再び、

凶悪な破壊者としてのゴジラを復活させるが、すぐにまた、キングギドラやモスラをライバルとして再登場させる。モスラとバトラは羽根を持つ巨大な蛾とその影。なんと宇宙にまで飛んでいく力を持つ。ビオランテは、バラと女性とゴジラ細胞の複合体。バラの花と触手を持ち、巨大な口を持つ。明らかに全体性の象徴と思われる。しかし、彼らも、ゴジラを全体性の中に調和させることには完全には成功しない。さらに、メカゴジラ、スペースゴジラ、デストロイアなどが登場するが、これらはゴジラのクローンであるから、次第にライバルがゴジラと同質化してきており、自分自身との闘争という形に変化していく。

イメージ的には、ゴジラは羽根を持たない龍であるが、第2期の平成ゴジラシリーズのライバル達はビオランテを除いて全て羽根を持っている。ビオランテも光の粉となって空中を飛ぶことができる。したがって、ゴジラとこれらのライバル達は、永遠に戦う二匹の怪獣、羽根のある龍と羽根のない蛇、羽根のある鳥と魚、二匹の魚、犬と狼、レバイアタンとベヘモットなどと同じ、深層心理レベルにおける元型的な二項対立の葛藤を表していると考えることが可能である。

日本のゴジラシリーズにおいては、ゴジラを含めてこれらの怪獣の全ては、決して単なる人間の敵ではない。米国のハリウッド版ゴジラにおけるゴジラが、人間の知恵と武力によって退治されるべき、単なる敵としてしか扱われ

ていないのとは対称的である。おそらく、日本人の集合的心性は、ゴジラや怪獣が自分とは無関係の排除すべき敵であるとは感じていない。それらは圧倒的で、破壊的で、恐怖の対象ではあるが、自分自身と深いところにつながっている、切っても切り離せない存在なのである。できればそれを自分と調和するものとして取り込みたい。そのような強い欲求を我々日本人は抱いているように思われる。

4. 「本能」と「反本能」の闘争

ゴジラ映画に表出されているような、根元的な二項対立的な闘争のイメージが、人間の心理の中に病的な状態として現れる時、それは「本能」と「反本能的な強迫的行動」の葛藤として現れることがあるように思われる。最も典型的な例が、若い女性に多く見られる心理的問題である摂食障害に見られる「拒食一過食一嘔吐」のサイクルである。過食は食という生物に必須の本能が、何らかの理由で不自然に抑圧されたあとで、まるでその不自然さに対抗するかのようによく生じてくる「本能的衝動」である。これを、意志の力でコントロールすることは極めて困難である。ところが、このような状況で、その人は、「食欲をコントロールして、やせよ、体重を減らせ」という無意識からの強迫的な要請を同時に受けている。そのために、患者は過食のあとに必ず嘔吐するはめになるのである。

この要求は、おそらく人間の個人の
こころを越えた、集合的なレベルの欲
求であり、「本能」に対抗する「反本
能」とでもいうべきものであろう。こ
れは、肉体を消滅させ、純粹精神へと
存在を変容させようとする傾向であり、
キリスト教神秘主義などにみられる傾
向と関連があるのではないかと想像さ
れる。いずれにせよ、この「本能」と
「反本能」の争いの状態は、ユング心
理学でいうところの元型的状況であり、
自我意識に対してはとてつもない苦し
みを与えるが、同時に自我意識を魅惑
する状況でもある。この状況から、対
立するものの統合、第三のものの新生
が生ずる可能性がある。しかし、あま
りに強い葛藤状況に耐えきれずに破綻
してしまう危険性、元型的状況に補足

されてしまい、いつまでもこの葛藤が
続くといった危険性も高いと思われる。

ゴジラシリーズが、圧倒的なエネル
ギー同士の永遠の戦いというテーマか
らの、脱却の道を示すことに成功して
いないように、このような戦いはおそ
らく完全に解消することはないのだと
思われる。しかしそこからは、新しい
ものが生まれる可能性がある。自衛隊
がこのような戦いにほとんど何も貢献
することができないのと同じように、
私達の自我意識がこのような根元的な
ドラマに関与できる部分は非常に少な
いのではないかと思われる。私達はゴ
ジラとキングギドラの戦いを、身をひ
そめながらじっと見守るしかないのだ
ろう。